

---

# 漢の娘と I S と

村崎さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漢の娘とISと

### 【NZコード】

N8773Z

### 【作者名】

村崎さん

### 【あらすじ】

織斑一夏は世界で初めてISを動かした事で有名な人間だ。

しかし、未だに彼らIS関係者は知らない。

もう一人の動かせる男性が、IS学園に潜んでいる事に。

## 第一話

世界は一変した。  
インフィニットストラトスが、今迄の世の中を変えていった。

発端は、世界中の軍部がハッキングされ、日本にミサイルが飛来した事件だろう。……多分。迫つてくるミサイルから日本の絶体絶命のピンチを救つたのが、一機のISだつた。

全てのミサイルを撃墜するどころか、ISを危険視して派遣された何処かの軍隊も駆逐した紛れもない兵器。

それが初めて、世に晒されたのだ。

この事件は後に……えっと、なんて言つたかな……確か「白騎士事件」と呼ばれる様になつた。

そして……えっと……なんか脅された日本が条約結んで……ISが……えっと……。

なんかこう、スポーツに使われる様になつたんだつけ。

で、それから……ああそうだ、男尊女卑から女尊男卑になつたんだ。何故かと言わるとISは女性にしか動かせないから。

あり得ないほど致命的な欠陥だが、基本性能が高過ぎるので制作者の……篠……篠原？

あれ、長篠？……篠……篠沢博士がそういう設計にした理由もなんとなくわかる気もする。

これが、俺の知つてゐるIS関係の全て。

世間一般では常識であろう場所が欠落してるのは、

元々欠片も興味が無かつたのに三日で詰め込んだからと自己完結し

ておいで。

あ、少し思い出した。

一つは、日本にはIS操縦者育成を目的とした高校がある事。  
もう一つは、ISを動かせる男性がもう一人現れた事。

そして最後に。

俺がISという物を通して得た教訓が一つ。

例えどんなに篠なんとかさんが天才だろうが。  
例えどんなにISがチート的高性能だろうが。

間違誤作動いは、必ずあるという事だ。

それに巻き込まれた人からすれば、実にいい迷惑である。

## 第一話

俺は、男だ。

何処にでもいる、一般的な男子高校生だ。  
運動が得意で、勉強が苦手な男性だ。  
股間に一本の柱を持つ、誇り高き漢だ。

だつた……筈……なんだ……。

春で連想されるものと言えば人それぞれあるが、

少なくとも今の俺にとつては『地獄の宴』だと言えるだろう。  
もしかしたら、前の席にいるこの男もそう思ってるかもしれない。  
或いはそれ以上か、それ以下か。

少なくとも、今確実に彼の気持ちを代弁するならば一つだけ言える  
事がある。

大勢の女子に囲まれるというのは、実際経験すると苦痛でしかない  
と言う事だ。

俺はそう予想して、ぼんやりと窓の向こうを眺め始める。

そう、ここはI.S学園。

未来のI.S操縦者を育成する為に設立された女の園。

周囲に男は、俺と前の彼しかいない。

他は右も左も前も後ろも上も下も生徒も教師も全員女性。

おっと、多少の訂正がいるな。

これはあくまで俺の視点だ。

俺から見れば男は一人だが、彼から見たら男は一人だけだろう。

なんたって、俺は女装してるんだからな。

(……自分で言つて恥ずかしいいいい！…)

心の中で絶叫する。

声に出せない気持ちがめちゃくちゃ歯痒い。

金ぐ、どうしてこうなったんだろう…。

「……さん、……さん」

そうだ……元はといえば係員が間違わず、IISが誤作動を起こさないやこんな事には……。

「……さん、……さん」

いや、諸悪の根源は面白がつてここに入学させる様に準備した父親だ！

次会つたら速攻でIIS使って捻り潰す！ むしろ捻り潰す！ 潰しきる！

「小川さん、小川さん！」

「ああ？」

誰かの呼ぶ声に地声で反応する俺。

瞬間、クラスの全員の視線が俺に集まる。

『え……今の何？』と言わんばかりの視線が俺に集中する。

「……あ

しまつたああああああああああああああああ…  
地声男の声じやんかよおおおおおおおお…

やばいやばいやばい…男だつてバレぬ…

入学初日から変態だと思われる「ひひひひひひ…」

「お、小川さん？ も、その声はびじつたのかな？」

「あ……えつと……」

どう切り抜けるんだ……この場を乗り切る方法は…?  
大体今の状況は…? 何故俺は名を呼ばれた…?

急いで周囲を見渡す。

……ああくそ！ ほとんど女だ！

とりあえず声についての言い訳が最優先である事は理解出来た。  
えっと、何か有効な言い訳は…！

「モ、その…」

……そうだ！

よくある方法だけど風邪だと誤魔化さう！

俺はあえて声色を変えず、そのまま喋った。

「の、喉を痛めまして…」

わあ、どうなる…?

「あ、そうだったんだ！」「めんね？ 体調は平気？」

「え、ええ……ありがと、『じめんこ』ます、先生」

教師は疑いもせず、むしろ俺の心配をしてくれた。

俺に向けられた視線も一気に薄れしていくのが感じられる。

……突破出来ちゃったよ。教師もクラスもチョロ過ぎやしないだろうか。

「じゃあ、自己紹介してくれる？ もう君の番なんだよ？」

緑色の髪の教師が自己紹介を促す。

ああそうか。初日だから自己紹介してたのか。

なら俺が呼ばれたのも頷けるな。

俺は優雅に立ち上がり、深々とお辞儀して本来の名から少し削った名を告げた。

「おがわわ小川悠です。悠と呼んでください」

本当は悠介と呼んでほしいところですがね。

「三年間宜しくお願ひ致します」

俺は深々とお辞儀をし、席に着いた。

よし、品行方正な影の薄い病弱女子っぽく振る舞えたな。

次は女子期待の男性の自己紹介だし、俺の事もそれ程記憶には残らないだろ？

うん、完璧な作戦だ。

「じゃあ次。織斑君」

「…………」

返事が無い。

俺みたいに何か考え方でもしているのだらうか？

「お、織斑君？ 織斑一夏くん？」

「は、はいっ！」

裏返った声が教室に響く。

周囲からはクスクスと笑い声が聞こえてくる。

よくやつた、織斑一夏。

これで俺の印象は益々薄らいでいる筈だ！

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？」

緑髪の教師が慌てた口調でペコペコ頭を下げていく。

その仕草を見る限り、年上の女性とは思えない。

数日したら生徒から渾名を付けられて尊敬の念もなくフレンドリーに接せられそうだ。

俺がそんな事を思いながら一人の様子を見ていると、織斑一夏が自己紹介を始め、

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

そしてすぐに終えた。

……え、それだけ？

他の人も俺と同じ事を思ったのか、織斑を見つめる視線が強くなる。

俺ですらもう少し喋つたんだからもう少し自分の事を語つたりどうだろうか？

趣味とか特技とか意気込みとか、ちょっと冒険して女性の好みを言うのも面白い。

まあ、俺は絶対やらないけどね。

「以上です」

ガタタッ。そんな音が響く。

首だけで振り向くと、何人かがぎゅっとこけている光景が目に入った。  
……さすがにそれはオーバーリアクションではないだろうか。

パンツ！

今度はまるで銃声の様な音が教室を響かせる。  
驚いた俺はすぐさま教卓の方に顔を向き直した。

見れば、織斑一夏が黒い服の女性に叩かれていた。

「げえっ、关羽！？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者！」

あ、また叩かれた。

あれは確實に脳細胞持つてかれたな。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

緑髪の……山田教諭が黒スーツの女性と話している。

会話の内容を察するに、どうやら黒スーツの先生、織斑教諭はこのクラスを担任する先生の様だ。

この人、山田教諭と違つてなんか出来る女つて感じだなあ。

俺が他愛もない事を頭に浮かべていると、織斑教諭が自己紹介を始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。

私の言つことはよく聞き、よく理解し。出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。

逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな

なんという宣言。

一体この教師は何様のつもりなのだろうか。

しかし他の女子は嫌悪感どころか、

「キャー！ 千冬様よ、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

むじる幸福そうな声で叫んでいた。実に理解し難い。

ていうか、千冬様？ 先生に、様？

この人は何か有名な先生なのか？

てか？ あれ？ ここの先生、苗字を織斑つて言つてなかつたか？

聞き出したいけど、目立つ行動になるのは目に見えていたのでものまま座つて黄色い歓声を聞いていた。

「あの千冬様にこ指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

駄目だこいつら、早くなんとかしないと……。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。

それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

毎年なんだ……出来る女はそれなりの苦労が付き物のようだ。

「きやあああああっ！ お姉様！ もつと叱つて！ 騙つて！」

「でも時には優しくして…」

「そしてつけあがらないように躰をして…」

どう聞いてもSMクラブです。本当にありがとうございました。  
どうやらこのクラスは変態度において弱冠十五才にして精銳揃いの  
様だ。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は

」

本田三度田の銃声。  
早くもクラスの名物になりそうな予感。

「織斑先生と呼べ」

……ああ、やつぱりこの一人姉弟だったのか。  
織斑なんて珍しい苗字で他人な訳無いよな。  
鈴木や佐藤、俺の苗字や山田とかありふれた苗字なら話は別だが。

「え……？ 織斑君ってあの千冬様の弟……？」  
「それじゃあ、世界で唯一男で『T-S』を使えるつていうのも、それが関係して……」

唯一といつ単語が聞こえた時、俺は少し微笑んだ。  
やつぱりバレていないんだなと安心する事ができた。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君今日はこれからT-Sの基礎知識を半月で覚えてもらひ。

その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。  
いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

織斑教諭がまた女子のM心を操る様な発言をする。  
それによつてまた黄色い歎声が上がることは無かつたが、  
織斑一夏の方は姉の発言に驚愕していた。

(.....)

まだ初日は始まつたばかり。

早く帰りたいといつも心の壁かべ、チャイムの音で揺さ醒さめされたよ  
な気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8773z/>

---

漢の娘とISと

2011年12月28日12時56分発行